

第13 信仰による一歩

【暗唱聖句】

「互いにこのことを心がけなさい。それはキリスト・イエスにもみられるものです。キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になりました。人間の姿で現れ…」フィリピの信徒への手紙 2章 5～7節

【日曜日・自己犠牲の愛】

「互いにこのことを心がけなさい。それはキリスト・イエスにもみられるものです…」とあって、パウロは語り始めます。そして、イエス様は神の身分であるにもかかわらず、自分を無にして僕の身分となって人間となり、十字架の死に至るまで従順だったと続けます。これにより私たちは、神は愛であることを知り、どれほど謙遜であることが大切なのかを学ぶことができました。それゆえパウロは、イエス様と同様に、私たちも自己犠牲の精神を持って、互いに愛し合わなければならぬと教えるわけです。もちろん、神と等しくあられたイエス様が自らを無にして人となられたことと、私たちが謙遜に生きることとは全くレベルが違うでしょう。しかし、愛に生きることを神様は私たちに望んでおられるということは、十分理解することができます。ただ、これは努力目標ではなく、イエス様の心と私たちの心が一つとされるとき、自然にわきあがる品性の実です。

【月曜日・献身の召し】

「イエスは、ガリラヤ湖のほとりを歩いておられたとき、二人の兄弟、ペトロと呼ばれるシモンとその兄弟アンデレが、湖で網を打っているのを御覧になった。彼らは漁師だった。イエスは、「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」と言われた。二人はすぐに網を捨てて従った」マタイ 4：18～20

弟子たちがすぐにイエス様に従ったと書かれているのを見て、驚かされる方も多いことでしょう。どうして、このように簡単に職を捨て、イエス様に従うことができたのでしょうか。何か特別なメリットを感じたのでしょうか。イエス様には人を惹きつける魅力があったのでしょうか。召しに従えば、より高い目的のために生きることができると感じ取ったのでしょうか。また、生活の心配はなかったのでしょうか。家族に相談する必要はなかったのでしょうか。おそらく、このような疑問はすべて意味をなさないのかもしれませんが。神様が直接私たちを召してくださるとき、言葉では言い表せない喜びや召命感が伴うものです。これは聖霊の働きです。バプテスマを受ける決心をしたときのことを思い出すと分かりやすいのではないのでしょうか。同様に、今でも主は私たちをその働きのために召しておられます。

【火曜日・パウロ—神に選ばれた器】

イエス様が働き人を召されるとき、思いもよらぬ人を選ばれる場合が少なくありません。その場合、一人ひとり新しく生まれ変わるような経験をします。悪霊に取りつかれたゲラサ人やサマリアの女、遊女に取税人、そしてその中でも最たる存在が、キリストの迫害者であったパウロでしょう。イエス様は、サウロが旅をしてダマスコに近づいたとき、天からまばゆい光と共に現れ、「サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか」（使徒 9：3）と呼びかけたのでした。そして、「起きて町に入れ。そうすれば、あなたのなすべきことが知らされる」と一方的に告げられたのでした。パウロは目が見えなくなっており、三日間一切食事をしませんでした。主はアナニアに、「行け。あの者は、異邦人や王たち、またイスラエルの子らにわたしの名を伝えるために、わたしが選んだ器である」（使徒 9：15）とお命じになられます。アナニアがパウロの頭に手を置いて祈ると、その瞬間目が見えるようになるのでした。アナニアはパウロに主の召しを伝えるだけでなく、教会との橋渡し役として選ばれたのでした。パウロはこのたった一度の回心を、多くの困難や迫害にあっても死ぬまで貫きとおします。使徒言行録の最後は、「パウロは、自費で借りた家に丸二年間住んで、訪問する者はだれかれとなく歓迎し、全く自由に

何の妨げもなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストについて教え続けた」（使徒 28：30、31）という言葉で終わっています。まるで、今でも尋ねて来る人たちに、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストについて教え続けているかのようです。パウロのこの続きは、わたしたちが引き継ぐのです。

【水曜日・愛の要求】

キリストに対する信仰を持つと、「キリストの愛がわたしたちを駆り立てているからです」（コリントの信徒への手紙二 5：14）とあるように、キリストに対する愛が原動力となって、主の働きを行わずにはおれなくさせるものです。そのため教会では、何のために主の働きをするのかと問う必要がありません。イエス様は三度イエス様を否定したペテロに対して、同じ数だけ「わたしを愛するか」（ヨハネ 21：15～19）と尋ねられます。ペテロはその度に、「はい、主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたをご存じです」と答えます。ペテロが主を否定したことが、これからの歩みに対して、尾を引きずることのないようにと配慮されたのでしょうか。イエス様はペテロが「あい、主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたをご存じです」と答えると、「わたしの小羊を飼いなさい」と言われました。主を否定したペテロを、主は用いられようとします。何度失敗しても、主は赦して下さり、もう一度チャンスを下さる方です。しかし、条件があって、それはイエス様に対する愛があるかどうかなのです。主の働き（この場合は牧者）の根底には、常にイエス様への愛が必要であることがわかります。

【木曜日・愛の誓い】

イエス様がペテロに3度も「私を愛するか」と尋ねられたのは、ペテロが3度否定したからだけではありませんでした。イエス様は「はっきり言うておく。あなたは、若いときは、自分で帯を締めて、行きたいところへ行っていた。しかし、年をとると、両手を伸ばして、他の人に帯を締められ、行きたくないところへ連れて行かれる。」と言われました。それは、「ペテロがどのような死に方で、神の栄光を現すようになるかを示そうとして、イエスはこう言われたのである」（ヨハネ 21：19）と書かれてあります。ペテロは迫害を受け、殉教の死を遂げることになることを主はご存知でした。使徒としての働きは、素晴らしい神様の栄光が現れる働きとなっていきます。しかし、同時に多くの苦難や試練が伴うものでもありました。それはイエス様の愛なくしては耐ええないことでした。このイエス様との3度もの「私を愛するか」というやり取りが、試練や苦難の中でもイエス様への愛を貫き、自分の進むべき道を進んでくための勇気と力を与えたことなのでしょう。イエス様はこのように話してから、ペテロに、「わたしに従いなさい」と言われたのであります。

また、イエス様を愛することと同様に、兄弟を愛することの大切さが教えられています。

「イエスは、わたしたちのために、命を捨ててくださいました。そのことによって、わたしたちは愛を知りました。だから、わたしたちも兄弟のために命を捨てるべきです。世の富を持ちながら、兄弟が必要な物に事欠くのを見て同情しない者があれば、どうして神の愛がそのような者の内にとどまるでしょう。子たちよ、言葉や口先だけではなく、行いをもって誠実に愛し合おう。」ヨハネ第一 3：16～18

主の愛に押し出されるようにして主のために働くということは、言葉を換えれば兄弟姉妹を愛することなのです。ここに到達しない働きは、主の働きとは言えないということです。